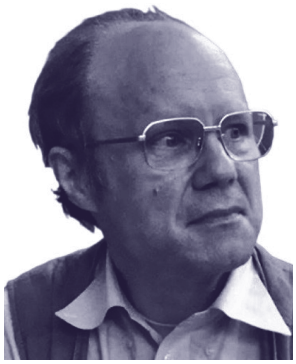
2024.10.11　No.90

# 文教大学の授業

文教大学教育研究所
埼玉県越谷市南荻島3337
℡ 048-974-8811 〒343-8511

## 英語で何を表現するのか：英語教育の原点は英語そのもののためではない

文学部　　グラハム児夢



米国ワシントン州出身。ワシントン大学での学生時代は多様な授業を履修し、中国語と中国現代文学の単位が特に多かったため、最終的にその分野を専門として卒業。大学院では専門性の薄い人文科学の修士号を取得。発展途上中の中国広西チワン族自治区の大学で2年間教鞭を執り、平成元年に文教大学に着任。授業内容は自身の大学生時代の学習態度を大きく反映し、「専門馬鹿防止」と批判的思考が主なテーマとなっています。（グラハム ジム）

「文教大学の授業」に寄稿する機会をいただき、光栄に思います。定年退職の時期となりました。最初のグラハムゼミの卒業生は現在孫を抱えている可能性が十分にあるほどの歳月が経ちました。学生の集中力や授業態度の変化を目の当たりにしながら、語学以外のトピックス、いわゆる英米文化を紹介するための授業を担当してきました。

### 好奇心

いわゆる英語の教師として採用されたが、英語そのものを教えるのではなく、英語で授業を行うことでした。まず、なぜ英語なのかという疑問を学生に投げかけると、ほとんどの場合は英語教育産業のセールストークが答えに返ってきました。またはアメリカという大国の影響力が原因だとも言われます。しかし、なぜ世界で4番目に面積の大きい国アメリカ合衆国の主な言語があの小さな島国英国の言葉なのか、学生は分からないようです。

一千年以来の最も影響力の大きな発明は何か、多くの学生はPCとかスマホと答えます。グーテンベルクの印刷機には着目しません。目に見えるものと話題性の新鮮な何かについて元気に語りますが、目に見えないものに対しては鈍感です。

英語圏の大学は日本の大学と同じく、コースの最終講義後に学生は拍手をしません。しかし、自分の学生時代の記憶には例外があります。マスコミ論のコースでは、ポップミュージック産業に関する講義が大きな拍手を招きました。確かに、私たち学生が既に知っている興味深いトピックであり、その点では私の学生時代の学習環境は文教大学とはそれほど異なりません。

良くも悪くも、この30年以上の授業経験は学生時代の「多様性」を反映しています。最初は大雑把な「時事英語」でした。その後、「米国史」や「科学と文明」。この最後まで一貫した授業は過去と現在社会におけるプロパガンダとその技法の分類です。これは最も有意義で最もためになる授業だと学生に評価されています。

### ディズニーランドと荻島五社稲荷神社

一度もディズニーランドに行ったことのない学生はいますが、その数は極めて少ないようです。その「夢の国」に魅了されることは非常に心地よく、抵抗なく受け入れる人がほとんどです。もちろん、その夢を保つために真実を捨てることもあります。実際、大手企

業であることは誰でも知っていますが、その遊園地の実態を明かすのはタブー中のタブーです。普段、ディズニーが批判的思考の対象になることはありません。独裁者なら誰でもそのような国を作りたいと思うでしょう。

「CMのないNHK」は何の恥もなく紅白歌合戦に堂々とディズニーを招きます。世界中の切手に登場するミッキーも同様です。登録商標でありながら文化財にもなっているミッキーマウスはほぼ疑問視されません。一方、過去のディズニー映画に現れる人種的ステレオタイプには学生たちはかなり敏感です。しかし、現在トランスジェンダーの人権を大きく提唱しているディズニー社はアメリカの社会保守派から怒りを買っています。

アメリカ現代社会における文化戦争の中で、ディズニーは強い味方となり、時代精神（zeitgeist）を鮮やかに反映しています。理性を狙うコンテンツかどうか、プロパガンダの作り方を学びながら分析します。ディズニーファンの学生でも冷静な立場からディズニーを見る姿勢は、この30年間変わりません。

数回ゼミ生と一緒にディズニーランドとディズニーシーに出かけたことがあり、「グラハム先生の辛口」を楽しそうに聞いていたようで、苦味より素敵な思い出が残っています。

ディズニーシーの結婚式場で行われた卒業生の披露宴に招待されたことがあるほど、ディズニーを授業に取り入れていたことのインパクトが強かったようです。

「灯台下暗し」という言葉がありますが、荻島五社稲荷神社は大学の近所にあるにもかかわらず、ほとんどの学生は行く理由がないため、訪れたことがありません。ディズニーランドとは正反対です。むしろ、目に見えているのに関心がないのです。図書館へ行く道はその参道でもあります。春学期の英米文化特殊授業Iの最終授業は、野外教育の精神を踏まえ、その境内で行います。一見「英米文化」と何の関係もなさそうですが、英米文化の歴史的なルーツは日本と同じく深く、宗教観の違いも非常に興味深いものです。多くの学生の心には絆のある神社が宿っています。荻島五社稲荷神社の境内では、お馴染みの鳥居、手水舎、注連縄、紙垂、稲荷大神、猿田彦、道祖神、疱瘡神、賽銭箱、本殿、拝殿などについて英語で説明してもらいます。昔の森羅万象に対する世界観は電池を不可欠とする技術重視の21世紀には合わないかもしれません。それにもかかわらず神道における仕来りなどは消えません。それが心の拠り所だからでしょう。その意味では、多くの人にとってディズニーも似た意義を持つかもしれません。神道の一部が商売的であれば、ディズニーも一部宗教的な要素を持っていると言えるでしょう。

**経済大国中国の台頭と英語教育**

振り返ると、特に言及すべき授業として、ある時期に2年生向けに行われたAcademic Writingという授業を見逃すことはできません。この授業では、英文で卒業論文を書くことを想定してデザインされています。その練習として、学生に現代中国に関する記事を書いてもらい、その推敲済みのものを思い出の品になるエッセイ集にまとめました。文化、科学、政治、地理、教育など、多方面の分野からトピックを掘り下げてもらったのです。

この授業はまた、漢字圏の文教生が正確に中国語読み（つまりピンイン）を英文記事に当てるための演習にもなりました。極めて少数ではありますが、中国語に興味のない学生がこの課題の目的を誤解し、英語専門なので英米文化関連の内容だけを期待していたようです。実際には、世界の英語話者の中で母国語として英語を使っている人はわずか20%であり、隣国である経済大国中国には千万人ほどの英語話者がいます。

共通語が英語になっている日中コミュニケーションのための専門的なテキストが存在していないからこそ、この授業は先駆的だったと言えます。しかしながら、編集作業は結局思いのほか重労働となり、第3巻で終了しました。

**終結**

私たち教員という創造性豊かな職人は、建築士などとは異なり、必ずしも苦労の成果がすぐに目に見えるわけではありません。バトンを渡しても、時代が変わっても、変わらないものがあるのです。